



一般社団法人

# JSHA 日本人間学会 会報

Japan Society Of Humanistic Anthropology Association

日本学会会議 協力学術研究団体

No.21 2022年秋号

〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-4-3-405 ☎0422 (38) 5075  
HP : <http://www.ningengakkai.or.jp> E-mail: [office.ningengakkai@gmail.com](mailto:office.ningengakkai@gmail.com)



## 会報 2022年 秋号

- 【投稿論文】 フランクルが最後に追い求めた普遍性：混沌の中にある現代社会における希望の光
- 【提言】 日本の教育問題について考える（第2回）  
— 日本人間学会からの提言 —
- 会員の紹介
- 事務局からのお知らせ

## 投稿論文

フランクルが最後に追い求めた普遍性：  
混沌の中にある現代社会における希望の光

研究会員 崎谷 満

### 要 約

ビクトール・フランクルは、一般にロゴセラピーの創設者としてしか知られていないが、アウシュビッツの悲劇を通して深い人間理解の思索を行ってきた哲学者である。この論考では、フランクルの直接の言葉に耳を傾けることによって、フランクルの真の価値を明らかにすることを目的として、初期のロゴセラピーの普遍性から、良心の普遍性を経て、最終的にたどり着いた宗教性による普遍性、個別性を包摂する普遍性を、フランクルの原典テキストによってあとづけた。このフランクルの普遍性が、科学的根拠に立脚する全人類共通の精神的遺産であることを基礎づけた上で、新型コロナウイルスパンデミックおよびロシアによるウクライナ侵攻によって混沌のさなかにある現代社会に対して希望の光を灯すものであることを指し示した。

### 1. 緒言

ヴィクトール・E・フランクル (Viktor E. Frankl: 1905-1997)

家族全員を殺害され、ただ一人生き残ったフランクルは (Frankl, 1946b)、そのような心理学者・心理療法家としての立場を超え、深い人間理解の思索を行ってきた貴重な哲学者である (Frankl, 1948; id., 1972; id., 1975a; id., 1977; id., 1998; Sakitani, 2013; id., 2014a; id., 2014b; 崎谷, 2016; Sakitani, 2016c; id., 2017c; id., 2017d; id., 2021; id., 2022b)。しかし残念ながらフランクルを心理療法家としての枠組みだけで捉える皮相な見解が一般的である。その誤解は、恐らくフランクルの深い哲学的思惟がドイツ語著作によってしかなされていない (Frankl, 1948; id., 1972; id., 1975a; id., 1977; id., 1998) ためにアクセスが限られていること、そして逆にアクセスが容易な一般聴衆向けの英語による講演 (Frankl, 1967; id., 1969; id., 1975b; id., 2010) が必ずしもフランクルの真の価値を表してはいないこと、などに起因するようである。フランクル理解にはドイツ語原典によってフランクルの偉大さに直接触れることが必須である。

今日、新型コロナウイルスパンデミック (Sakitani, 2020) によって全世界の連帯が必要とされる時代になった (崎谷, 2020b, pp. 53-69; Sakitani, 2021b) にもかかわらず、ロシアによるウクライナ侵攻に見られるように、他民族の存在を否定し、基本的人権に対する蹂躪が繰り返されるような現代社会の混沌の中で (Sakitani, 2022a)、フランクルがその辛苦を舐めた体験から行き着いた普遍性の価値を理解し (Sakitani, 2022b)、今後の社会の安定と再生に向けてフランクルが追い求めていたものを活かす必要がある。

日本人間学会は、創立者高島博初代代表理事がフランクルの直接的な支援 (高島, 1988 [2016]) を受けることによって設立され

## 会員の紹介



研究会員

エマニュエル・ベベニョンさん

今回は、研究会員のエマニュエル・ベベニョンさんをご紹介します。

ベベニョンさんはアフリカのベナン共和国出身で、現在神奈川県横浜市に在住、フェリス女学院大学で英語の講師をされ

ておられます。最初に日本を訪問したのが1999年のこと。奥様の実家である鹿児島県屋久島を訪れたことに始まるといいます。当学会には2007年、日本人の友人の紹介で入会されました。

### ベナン共和国



彼の祖国ベナン共和国は西アフリカのギニア湾に面した人口1200万人（2020年）の国。18世紀ダホメ王国時代、136年にわたり大西洋奴隷貿易の中心地でした。

奴隷貿易の廃止後フランスの植民地（1863-1960）となりましたが、1960年に独立。その後5度にわたる軍事クーデターの勃発から1975年マルクス・レーニン主義による社会主義国家となり国名をベナン人民共和国に変更しました。しかし、軍を中心とした独裁政権下で経済は悪化の一途をたどり国民生活は困窮していきました。そして1989年国民会議においてマルクス・レーニン主義の放棄を決定し、多党制民主主義国家「ベナン共和国」が誕生し今日に至っています。

過去に大西洋奴隷貿易の中心地であったということは、当時のアフリカ現地人が西欧諸国の奴隷商人と結託し、同じ現地人を奴隷として国外に送っていたということです。その数2500万～3000万人にのぼるとも言われ、そこには同じ民族間による筆舌に尽くしがたい悲劇が生まれていたのです。

ベナンは民主化後、これら過去の歴史的事実を認め、欧米に

奴隷として強制的に移送された人達の子孫との怨恨を解くため、和解と発展の運動を国家プロジェクトとして推進してきました。

また、社会主義体制を放棄し、多党制民主主義を導入する過程で国民会議を開き、時の大統領との数次にわたる話し合いの結果、武力によらず平和的に体制転換を成し遂げた和解成功の実績をもつ国でもあります。

### 来日後の活動

ベベニョンさんは来日後、地元横浜の高校で英語を教える傍ら、祖国ベナンの奴隷貿易や和解運動を紹介する活動を地道に行っていました。そして、徐々に支援する人たちが増える中で、ある高校の英語教諭が大学時代に黒人奴隷問題を卒論のテーマにしていたことから、共に異文化交流会を企画開催したり、高校の研究授業にベベニョンさんを招いて、学生たちに和解運動を啓蒙する機会を作ったりもしました。

当会でも彼の入会に伴って、当時日本国内では乏しかったベナンの歴史や和解運動に関する詳細な情報を知ることができました。特にベナンが対話によってマルクス・レーニン主義を放棄し民主化していったプロセスに注目して会員達が研究を行い、後に当会の社会貢献活動の柱に位置づけることになりました。

### 当会での活動

ベベニョンさんは本国ベナン政府関係者に多くの人脈を持っています。当会代表一行が2009年ベナン共和国に訪問した際には、ベナン政府関連機関への案内役として活躍しました。また、2010年12月には、当会が後援したベナン独立50周年記念行事を東京で開催した際には、在日ベナン大使館との連携に多大な貢献をされました。

その後、ネパールに訪問した際にも、当時不安定な国情を抱え新しい国家体制構築を模索していた政府関係者に、ベナンの和解成功の事例を紹介し注目されました。また、ニューヨークの国連本部に和解発展運動に関する企画提案のため訪問し、現地ベナン関係者との交流の機会をつくりました。

このように、ベベニョンさんと人間学会の対外活動は「和解と発展」を合言葉に親密な関係を築いてきたことがわかります。

### 書籍の出版

その後、中心的に活動していた理事が一線を退かれたことやコロナ禍に見舞われて対外活動は縮小しましたが、その間に、彼が当学会と共に推進してきた活動実績を整理して、アメリカで本の出版をしたのです。この朗報は、彼が事務局を通して代表理事宛てに推薦文の依頼をしてきたことで明らか

になったことです。そして、今年（2022年）邦訳版の準備を開始し、8月に正式に出版に至りました。

## 今後の抱負

来日後20年に及ぶベニヨンさんの足跡を振り返ってみると、一貫して祖国ベナンを代表する親善大使として、和解運動の活動に献身的に取り組んできたということができるといえるでしょう。当学会と積極的に連携していかれたのも、日本との関係を

深めることで、この和解発展運動を世界的に広め、世界平和に貢献していく足掛かりにしたいとする志があったからです。

彼の今後の活動に関する抱負を伺うと、この度出版した本「ベナン発 和解から平和へ」を日本の人達に広く啓蒙していくこと、特に、世界に平和をもたらすための対話や和解の必要性への認識を高めるため、学校や大学の授業でこの本の内容が採用されるように積極的に働きかけていきたいとのことでした。

## 書籍紹介

## ベナン発 和解から平和へ Beginning with Benin

この著作は、エマニュエル・ベベニヨン教授と彼のチームによる努力によって書かれたもので、大西洋奴隷貿易とその世界的な影響の検証から、和解への運動、インタビュー、活動全体の過程を記録しています。

### 目次

#### ■ パート1 ベナンの背景と歴史

- 第1章 ベナンの発見
- 第2章 大西洋奴隷貿易：ウィダーとポルトノボ
- 第3章 大西洋奴隷貿易後のベナン：植民地時代
- 第4章 独立国家の誕生
- 第5章 武力統治の時代
- 第6章 国民対話とコンセンサスの時代

#### パート1 批判的思考と議論

#### ■ パート2 和解の遺産

- 第7章 ウィダー 92
- 第8章 ユネスコ 奴隷の道プロジェクト
- 第9章 ベナン国際会議
- 第10章 国際会議の原理
- 第11章 和解の遺産を未来につなげる

#### パート2 批判的思考と振り返り

#### ■ パート3 和解への歩みとその活動

- 第12章 和解への目覚め
- 第13章 ベナンと世界を再び結ぶ
- 第14章 記念行事と祝賀会
- 第15章 国内および国際会議に関する講演
- 第16章 和解による平和と発展の世界フォーラム2010

価格 3,300 円

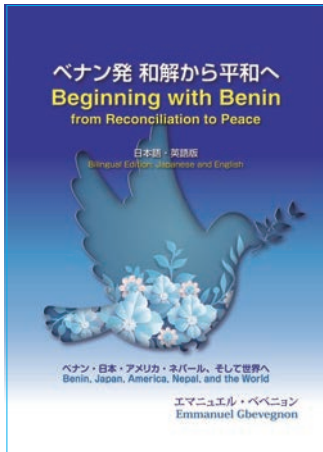
出版社：万代宝書房；四六判版

(2022/8/29)

発売日：2022/8/29

言語：日本語

単行本：200 ページ



## 事務局からのお知らせ

### 新しい会員特典について

当会では、これまで新しく入会された方に対して、何かの学びの場やメニューを提供したりすることはありませんでした。これは、いわゆる「学会」というものが研究会員を中心とした研究発表の場としての色合いが濃かったからであります。

また、学会の置かれた環境にも影響されていて、事務局が大学内の学部に設置されているケースも多く、一般会員として所属している人達は、ある特定学部の学生で占められていたり、大学の専門ゼミのような性格をもつ学会も見受けられます。

当会の場合、諸学の根本である「哲学」分野を扱っており、

研究の対象は実存する人間であります。従って、入会を希望する方の中には、研究とまではいかずとも、「人間（私）とは何か」を追究するための「学び」の場を探して問い合わせられて来られる方があります。そういう方々は、そもそも人間学とは何なのか、一つの教養として基礎的なところから学びたいという声意外にも多いことがわかりました。

そこで、事務局では改善策を検討した結果、去る5月から研究会員の協力を得て次のような会員特典を新たに追加することになりました。

## 追加された特典の内容

- 新規入会者に人間学のテキスト贈呈
- 入会后4か月間Eメールによる人間学のサポート
- サポートは無料

入会された方にもれなく、人間学のテキスト（菅野盾樹著『人間学とは何か』）を贈呈いたします。このテキストは、人間学の入門書として定評のあるもので、一読すれば人間学のおよそのことがわかるようになっています。

ただし、専門的な学術書の性格を帯びた書物であるため、独学で取り組むには難しい面もあることを鑑み、入会された月を含め、四カ月の間、当会の有志の研究会員によるメー

ルでのやりとりというかたちで、人間学の学びをサポートすることに致しました。

具体的に言うと、『人間学とは何か』を読んだ感想をメールで送っていただき、それに対して当会研究会員が返信をする、という企画となります。新規会員特典なので無料です。

このサービスについてご不明な点等ありましたら事務局までお気軽にお問い合わせください。

なお、メールによる学びのサポートは過去に会員登録をした方でも有効ですので、ご希望の方はお申し出ください。



## ◆ 編集後記 ◆

今回、崎谷先生がV・フランクルに関する論文を投稿されました。また会員紹介ではエマニュエル・ベベニョンさんの活動としてベナンの和解運動を紹介することになりました。このフランクル研究と和解運動は、どちらも当会の活動の軸にしてきたものです。

和解運動については、今から10年前に故今村和男代表理事から、学術的研究にのみ軸足を置く学会のあり方を見直し実学として人類の平和と幸福に具体的に寄与する活動を並行して推進すべきとの意向を受けて取り組み始めた活動でした。そして、当時ベナンにおける和解成功のプロセスを研究し、哲学的人間学に立脚した和解発展運動として国内外に積極的な啓蒙活動を展開していきました。

その後、中心的に動かれた役員や関係者が一線を退き活動自体は縮小を余儀なくされました。日本を取り巻く国際情勢も大きく変化し、昨今では周知のごとく専制君主体制を敷く国家群の力による現状変更の働きかけが目に見える事態となりました。もはやこの潮流を制止できるのは武力を背景とした

自由主義先進国の政治力以外にないという現実、我々が掲げた対話による「和解と発展」の道のりは前途多難な状況にあります。このままでは過去の歴史が証明するように、再び多くの人々の犠牲によって事態を收拾して行くことになるやもしれません。もしそうなれば、我々人間の価値や尊厳は再び地に落とされ、次世代に大きな禍根を残すことになるでしょう。

我々の取るべき態度は明確です。ことさら無力であることを理由に手をこまねいてこの現実を傍観するのか、それとも何等かの行動を起こしていくのかのどちらかです。我々は勿論後者ですが、その取るべき行動とは、今回崎谷先生の論文の結論で示された「フランクルの直接的支援によって設立された日本人間学会は、フランクルの真の価値を明らかにし、広く世界にその精神的遺産を知らせて行く」こと、即ち、そうすることで今見失いつつある人間の価値と尊厳の回復に貢献することなのでしょう。会報編集の過程で、当会のフランクル研究と和解運動は、共に新しい段階に入るべき時点にあることを強く感じた次第です。

## 一般社団法人 日本人間学会 会報 2022年秋号 No. 20

発行日 2022年11月10日 発行人 瀧 順一郎

発行所 一般社団法人 日本人間学会 〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-4-3-405

HP : <https://www.ningengakkai.or.jp> Email : [office.ningengakkai@gmail.com](mailto:office.ningengakkai@gmail.com)

☎ 0422-38-5075